



東日本大震災から3年  
今も続く被災地支援のカタチ

東日本大震災から3年を迎えますが、被災地復興には課題が多くこれからが重要な時期となります。東洋大学では多角的な被災地の支援を継続しています。

# 継続的なフィールド活動により 学生たちが成長

社会学部社会福祉学科の森田明美教授は、東日本大震災が発生した2011年から岩手県・山田町で中学生の学習支援を行っています。活動拠点は、森田教授が理事長を務めるNPO法人こども福祉研究所が運営する「山田町ソントハウス」。仮設住宅などに暮らしているため、落ち着いて勉強できない中学生のために開設した軽食付自習施設です。

## 大学として繋がる支援

森田ゼミの学生たちは、長期休暇には毎年、山田町を訪れボランティア活動を行っています。2013年度は3班に分かれ、9月と1月にソントハウスを訪れました。同学科林大介助教のゼミ学生たちも同じく9月に山田町ソントハウスでボランティア活動を行いました。

山田町は宮古市と釜石市の間に位置する三陸海岸沿いの町で、津波とその後発生した火災により壊滅的な被害を受け、町民の4%強が死亡や行方不明となりました。

森田教授は、ゼミの卒業生の1人が同町出身だったことから、2011年5月に町を訪れ、支援について地元の人たちと協議を重ねてきました。結果的に山田町の将来を担う中学生のための軽食付自習用スペースが必要ということで議論がまとまり、国際的な社会奉仕団体「国際ソント」日本支部から資金援助を得て、浸水した店舗を改装し山田町ソントハウスを開設することになったのです。

9月4日のオープン直前には森田ゼミをはじめとする東洋大学の学生がボランティアとして多数参加し、掃除やペン

キ塗りなどを行いました。現地でソントハウスの運営に携わっているこども福祉研究所山田支部の舟田春樹さんは「ソントハウスは中学生の交流の場にもなっており、皆明るく、生き生きとしてきました」と言います。

今年、ソントハウスでボランティアに参加した学生の1人は「町の人は皆、ソントハウスのことをよく知っていて、どこへ行っても東洋大学の学生を歓迎してくれます。復興支援は継続が大切で、これからも続けていかなければならないと改めて思いました」と感想を語ります。

## フィールドで学生が育つ

森田教授の専門分野は、子どもの権利を基盤とした児童福祉学です。ゼミでは、インターンシップやボランティア



2014年1月11～13日は被災3県から中学生20人を東京に迎えて、東京の中高大生との交流や意見交換会をサポートしました。12日に白山キャンパス125記念ホールで実施した意見交換会には、約50人の一般市民を迎えて、子どもの意見表明が安心して言えるようサポートしました



社会学部社会福祉学科  
森田 明美 教授

社会学部社会福祉学科教授。専門は、子どもの権利を基盤とした児童福祉学。現在、NPO法人こども福祉研究所理事長をはじめ、東京都世田谷区青少年問題協議会副会長、東日本大震災子ども支援ネットワーク事務局長など、複数団体の役員を務める。

活動を通じて子どもと深く関わることを活動方針としており、2013年度も東京都内や千葉県内の行政やNPO法人などで子どもたちの学習支援といったフィールド活動に参加しました。

森田教授は「学生たちはフィールドに育ててもらっています。大学での学びとフィールド活動のコラボレーションによる教育効果で『いい大人』になっていく。学生が『いい大人』になって子どもに接することで、子どもたちが自分で何かをしようと動き出す力になっています」と話します。

## 子どもの背中をそっと押す

森田教授は福島を被災者を支援する「サマーレスパイトデイズ」という活動も続けています。レスパイト (respite) は小休止を意味する英語で、東洋大学のセミナーハウスに1人親家庭の子どもたちを招き、リフレッシュしてもらう活

動です。この活動は、福島第一原発の事故の影響で、外で十分に遊べない子どもたちのことを憂った森田教授がNPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ福島に声をかけ、2011年7月に第1回目の活動が実現しました。

3回目となる2013年は7月13～15日に開催され、28人の子どもたちと保護者を合わせて41人が参加。ボランティアとして森田ゼミの学生と、ライフデザイン学部生活支援学科中原美恵教授のゼミで保育士を目指している学生たちが参加しました。子どもたちは、午前中は宿題、午後は海遊び、夜は花火といった、まさに夏休みならではの遊びに熱中しました。この3日間は、1人の子どもを2人の学生が担当。「1人親の子どもたちは親が仕事で忙しく一緒に時間が短いんです。学生たちが常に寄り添うことで、子どもたちも心を開いてく

れます。同時に親も育児から解放されてリラックスできます」と森田教授はその効果を説明します。

しんぐるまざあず・ふぉーらむ福島の遠野馨さんは「それまで不登校だった子どもが、サマーレスパイトに参加した後、2学期からすすんで登校するようになったんです。まるで学生たちが魔法をかけてくれたみたいです」と驚きを話します。

森田教授は「自分のことだけをずっと見てくれる『いい大人』に出会えたことが大きいのでしょう」とうれしそうに語ります。学生たちは、森田教授の期待に応えて、大きく成長しているようです。



山田町ソントハウス。中学生たちは1階で軽食を食べてから、2階で勉強する(右の写真は2011年8月に撮影)



サマーレスパイトデイズに参加した子どもたちは、海や花火などで思い切り遊んだ



## 世界のPPP専門家から見た東北再生提言

東北復興に世界の知見とPPP(Public-Private Partnership:官・民・市民の連携)のアイデアを生かすため、2013年秋に世界の13大学院を招待し「世界の専門家から見た東北復興支援学術コンペティション」を実施しました。

参加した大学院からは、被災地の漁業・農業・林業の再生、観光客誘致策、被災住宅の復興の考え方、新産業・新エネルギーの活用など、さまざまなアイ

デアが寄せられ、専門家の審査を経て3校が優秀校に選定されました。

2014年2月10日～12日には、優秀校の学生が被災地を訪れ現場の生の声を聞き、2月14日には、白山キャンパス125記念ホールにて、各校が被災地訪問を踏まえてブラッシュアップした提案内容を発表しました。

### Tohoku Recovery Academic Competition プロジェクト優秀校

- 第1位 ハーバード大学デザイン大学院(アメリカ)
- 第2位 建設・土木・測地学大学院(ブルガリア)
- 第3位 クイーンズランド州立大学大学院(オーストラリア)



PPP研究センター WEB <http://www.toyo.ac.jp/site/pppc/>



## 学生ボランティア活動 東洋大学東北応援プロジェクト(TOP)

2011年夏から「東北応援プロジェクト(TOP)」の1つとして、春季、夏季の長期休暇を利用して東北各地に学生ボランティアを派遣しています。

2013年は、8月10日～9月16日を複数クールに分けて、岩手県と宮城県の被災地にてボランティア活動を行いました。

毎年、ボランティア募集にはたくさんの学生からの応募があり、2013年夏までに、のべ約1300人の学

生・教職員(引率)が参加しました。

2014年2月14日～3月24日(春季休暇中)には、約150人の学生が岩手県大槌市、大船渡市、陸前高田市、宮城県気仙沼市などで農家や漁港での手伝い、障害者施設での活動、学童保育指導員の補助などさまざまなボランティアに参加します。被災地の1日でも早い復興の力になれるよう、引き続きTOPの取り組みを続けていきます。

東北応援プロジェクト活動報告 WEB <http://www.toyo.ac.jp/site/2011reconstruction/32895.html>